紅豆詞人和李後主歌集

紅玉

木下利玄歌集

大正八年八月

利玄

こうきょく

芦田武様

武者小路實篤兄に

大正八年五月
東京玄文社發行

目次

夏子に……一
大きな鳥……二九
春日……三七
接骨木の新芽……四五
波……五一

工場……五九
磯潮……六三
峽の午後……七一
冬に入りて……七七
深夜……八七
晩歸……九三

月光……九七
加賀の潛戸……一〇五
石棺……一三一
伯耆の大山……一三七
伯耆三朝溫泉……一四七
月しろ……一五九

遠渚……一六九
草の穂……一七五
草しげり山……一八一
驟雨……一八七
出石より久美濱へ……一九三
日のかげり……二〇三

白晝……二〇九
曇れる川……二一九
雨霧……二二九
二郎に……二三五
萱山……二四九
雜木の芽……二五九

冬山……二六九
密柑の香……二七七
高原……二八三
濡るゝ樹木……二八九
土のしめり……二九三

夏子に

大正六年十一月二十九日、吳より道後に着きしに、吾子病みて稍わろしとの電報、別府の寓よりとゞきゐつ。

心配に胸おしせまり溫泉の街に遊ぶ人等
をうとみつ我は

其夜の不安云ふべくもなし。

或は來ん次のたよりをおそれつゝ足音に
耳立て安眠しなさぬ

病める子に心はかゝり夢に見つゝうつゝに
思ひつつ安眠しなさぬ

翌日晝出づべき別府行の吉野川丸は、遲れて夜おそく高濱を出帆す。

船室のあさき眠の覺め勝ちに執念く吾子
をおもひぞ吾がする

海の沖のしら〳〵明けに海人小舟出でゐ
る中を汽船すゝみをり

黎明の光に向ひ舟こげる漁人の顔を汽船
より見たり

ふなばたに吾子おもひをれば眼に揺れて
暁海（あかつきうみ）の波は蒼しも

十二月一日早朝別府埠頭に着く。夏子妻に伴はれて某医院に在り。

久しくてこの子に寄れるに病みたれば面
もちまじめにわれを見てをり

いとし子の臥床（ふしど）によりそひその額（ぬか）に手お
けば熱（あつ）しかはゆきものを

泣く力今はなくなり病める子の眼（まなこ）つぶら
に吾を見るかも

吾子よ〳〵くるしからめど力出しこのいたつきをしのぎてくれよ

眞夜中を戸外にすさべる風の音わが子よ父はこゝにゐるぞも

三日朝は大に快かりしに、四日午後吾も妻も家に歸りゐし時、俄によりしからずときく、吾は直に、入浴中なりし妻もすぐ後より病院に走る。

わが妻とぢつと眼をみあはせぬこの吾子も亦今死なんとす

肉身の捨てはてかねし望さへ今は絶えゆき吾子死ぬるなり

脈あらず醫師おごそかに聲低に三時半な
りと云ふ吾子全く死す
金輪際なくなれる子を聲かぎりこの世の
ものゝ呼びにけるかな

婢はまだ息あるにと吾子により醫師をい
きどほりおろ〳〵泣くも
おぎろなし子と父母と一心に慕ひあひつ
つも死にわかれけり

わが妻は吾子の手握り死にてはいやや死にてはいやと泣きくるひけり

眼のまはり眞紅(まあか)くなして泣きやめぬ妻のうしろに吾子死にてあり

吾ひたすらに慰めつ。

わが妻も今は泣きやめしみ〴〵と銀杏が黄なりと云ひにけるかも

泣きやめて心は澄めり向うなる一つ藁家の夕げの煙

はりつめし心はおちてしみ〴〵と向うの
煙みつめしかなや

日暮、數日前、妻が風にあてじと、その顏に布をほひて、病院につれて行きしと、おなじ道を、遺骸を抱き、吾等つきそひ罵に歸る。星斗天に滿つ。

吾子の事を可愛がりくれし隣人よその子
死なせて今かへり來つ

朝毎に來る、豆腐を賣ぐ少年の聲、今朝は殊更さびしく

吾子のゐぬ寢ざめくるしも甲高にさはな
呼びそぬ物賣り童

橡側に亡くなりし子の汚れものこの夕か
げをしろ〳〵うかべり

この事もすぎ去りにけりと椽先の白菊見つゝ嘆かひにけり

六日夕本邑に附す。

いとし子を焼場にやると親さびて好みし着物をきせにけるかも

何事も今は甲斐なき吾子なれば野邊に送らんいとなみするも

まなかひにもとなかゝりし吾子の身を火に焼くものか死にせればとて

黒塗のあやしき車吾子のせて山へ山へと
行きにけらずや

隠亡は今火を入ると竈の中の吾子にむか
ひておらびけらずや

柩の中の吾子の面わをおもひつゝ人のう
しろに立ちてゐにけり

燃えとよむ炎の立ちの吾子のゐる柩つゝ
むをひた目守りつも

夕空に立つ煙突にわが夏子けぶりとなり
てなびかひゆくも

吾子一人焼場に殘し夜と云ふにわれ等大
人はかへらんとする

きぞの夜に吾子の焼かれしあとぶころ未
だ小さかりし骨を拾ふも

十七日、遺骨を携へ、別府を引拂ひて、上京の途に就く。

海峡の夜浪荒しも船室に骨壺守りて眼を
おとし居り

骨壺を網棚に上げ氣にかけて時々あふぐ
その白つゝみ

冬の夜の東京驛に骨つぼの白き包もち下
り立ちにけり

夏子がありし日の追憶。

鼻の上に少し皺よせわが妻のいとしみし
子は死にゝけるかも

みごもれる程もおとなしくわが妻に女の
童らしと云はれし子はも

乳房ふくみ今まで泣きしまみ上げて乳母
をしげしげ見いりし子はも

はゝそばの母に抱かれてふとり身を日毎
温泉にひたせし子はも

がら〳〵を振りあきぬれば振りすさびつ
むりを打ちて泣きし吾子はも

知らぬ人に抱かれてさへむづかりしめぐ
しきものよ死にてゆきけり

胸まとふ濕布かふると抱く時しかめし面
わは眼に彫られたり

死にたくはなかりけんものを手足冷え息
絶えきては生きらるべしや

追ひ行かば何處の隈かにいかくれてある
如も吾子をおもほゆるかも

吾子よ吾子よ生きてだにあらばかい抱き
いやます〳〵にいつくしまふしを

谷中なる墓どころ。

二才にて失せたる兄の傍らに一才の妹を
葬りけるはや

をさなければ楹の枝にとりそへてよき色
花を手向けけるかな

おくつきは並びたれどもうつし世に相ひ
逢はざりし吾子三人はや

墓土に水をそゝげばしみ入りつゝの下
なる吾子とこそおもへ

これやこの三人の吾子の墓どころ土のし
めりに身をかゞめけり

大きな鳥

大き鳥入りし樹に行き耳すまし梢（うれ）のけはひをうかゞひにけり

今の鳥はこの樹にゐるにちがひなしひそかに枝葉の中を見上ぐる

この樹は今鳥かくせりとおもひつゝ眞下
より見る枝葉のうらを
重なれる枝葉さびしもさきに入りし鳥は
この樹を蓋さりけむ

遠足

遠足の小學生徒有頂天に大手ふり〳〵往
來とほる

子供等は列をはみ出しわき見をしさゞめ
きやめずひきゐられて行く

この灣の波の最中に軍艦の入り來て場を
占めさ搖らぎもせず
軍艦の鐵のふなべりまみを占め蒼ぐろ波
に艀ゆらぐも

軍艦の腹のひたれる蒼波をわが艀ゆもう
つゝに見たり

水兵はひさしぶりにてふむ地か歩毎にお
こる靴音よろし

嬰児

をさなきが枕外(はつ)して眞晝間に熟睡(うまい)を寢(い)ぬ
る息づかひはも

賀來川

川の面に舟ひそけかり下つ瀬の遠き瀬の
音をこゝにきゝつゝ

川の面の晝ひそけかり舟の腹ぴた〳〵た
たく小波(こなみ)ひさしも

春日

大地(おほつち)に陽炎(かげろふ)粘(ねば)し春の日のわがみち行きの
ほと〳〵倦める

この見ゆる麥生の春日おもくるし稍ひさ
しくて風醸(かも)されぬ

どんよりと春日かすめり桃畑の土のかわ
きに枝かげ淡く

鍬の刃の土間の石に或はふれ畑のかわき
に春日あつしも

街裏の川に出て見れば倉庫の壁夕ましろ
さの水にうつれり

畫山の松吹く風の音澄めりあかるき道を
一人しあゆむ

海のいろあをくつめたし甲板の春日のてりにのぼせて居ればり

錨下り汽船はばつたりおともなしすなはち艀近よりきたる

この浦に今汽船二艘かゝりたり岸べに立ちて心ゆたけき

時ならぬ午後のくらさよ二階より黒雲の此方(こなた)の木の芽を見るも

黒雲はおつかぶされり片空の日光に射ら
れ雹落ち來る

菖蒲

かぐまりてわが息づかひしたしもよ菖蒲
の花のかさなりて見ゆ

花菖蒲かたき莟は粉しろしはつはつ見ゆ
る濃むらさきはも

接骨木の新芽

朝じめり薮の接骨木芽（にはこ）はおほく皮ぬぎて

をりねむごろに見む

もろ向きににはとこの枝ひろがれり新（にひ）ふ

と青芽あまねくもちて

にはとこの芽を見て立てばこの道を人の
話のきこえて來る

にはとこの新芽ほどけぬその中にその中
の芽のたゝまりてゐる

にはとこの芽のひろげもつ對生の柔かき
葉に風感じをり

にはとこのこの新芽はもまなかひにあた
へられたる青さにあをし

夕さりの光ねむごろにあかるきにはと
この芽のよく〳〵あをし

夕風のつめたく觸るゝにはとこの新芽の
そよぎまさにさやけし

夕風のつめたくふるゝにはとこの芽よわ
が胸にはたらきかくる

にはとこの新芽を嗅げば青くさし實(じつ)にし
みじみにはとこ臭し

波浪

にはとこの新ふと青芽日ならべてさやり
あひつゝ繁らんとすも

のびあがり倒れんとする潮波蒼々たてる
立ちのゆゑしも

大き波たふれんとしてかたむける躊躇の
間もひた寄りによる

たふれんたふれんとする波の丈(たな)をひた押
しにおして來る力はも
波の秀(ほ)はすでにいさゝか覆(か)へりたれどう
ねり盛り返へし猶し寄り來も

今まさにたふれんとする潮波ますぐに立
てりたふれてしまへよ
大き波うねりのびあがり高みより磯もと
揺(ゆる)りたふれ落ちたり

海(わだ)の波めがけたる磯に遂により力かたむ
け倒れとよめり

海の沖ゆうねり押し寄するいきほひのご
こにきはまり波くつがへる

うねり波たかまりあがり水底(みそこ)めがけ重み
まかせに倒れたるかも

海の波磯を間近み覆(くつが)へりはやりたちさわ
ぎましぐらに寄す

ほしいまゝにのびあがりたる波のおもみ
倒れ疊まりとゞろと鳴るも

波の丈遂にくつがへり彈みあがりひしめ
き寄する荒き潮騷

くだけたる波の白泡いつさんにひろがり
つめんときほひ寄せ來も

工場

佐賀關精錬所

他事なく働きつゞけ時たけて職工たちは
午食(ごしよく)ちかしも

かしましき機械の音に耳張りつめ目には
見て居り工場(こうぢやう)内部(ないぶ)

工場出ればすでに晝なり構内の眞土にま
日のかぐよへるかも

工場出て機械の音は遠退けり耳なごやか
に風のさやるも

煙突の口ゆもり上る黒けむり日輪の前を
よこぎれるかも

日の光土にいふせくにごりたり煤煙空に
ひろごりにつゝ

工場裏機械のおもき音ひびく大地のはだ
には日がしみてゐる

磯潮

別府

朝の潮ゆたかにみてり築岸(つきぎし)に上(うは)揺れ波の
上(のぼ)り下(お)りすも

築岸の下すぐ深き朝の潮揺れ寄る毎に石
間鳴らすも

まさやかに沈透く小石のゆら〳〵に見え
定まらず上とほる波

渚よりなぞへに深き海なれば小石うつ波
きのみはよらず

波のうねつぶきとほるに潮の上の岩の頭
のかわきあへなく

渚べの小石の濡れに夕づく日ちつとさし
あて風のつめたさ

夕濱のながき渚の波の音間遠にたゆくく
りかへりをり

波の上わたりて冷えし濕り風耳にそよげ
り夕日の渚

たふれたる波のひざきの底力ゆたに夕べ
のなぎさとよもす

夕しほのみてる磯わの山の影多くの波に
ひたりゆらげり

山の容ひたる夕潮とのぐもり光とかげを
ゆららに絢ふも

海めがけ思ひきり投うる石一個たゆたふ
波をぽつつりうがてり

はがね色の灣一面のとがり波西日きらゝ
に風すさぶかも

とがり波灣一ぱいに騒ぎ立ち磯崎こえて
日は傾けり

峡の午後

畫すぎて日の目に遠き懸崖に仰げばさむき羊歯の簇り

峡ふかく乏しき光保ちつゝ植物の葉のつぶさに青し

峡ふかく光乏しもたゞへたる湿りに飽き
て羊歯はゆるがず

峡てらす短かき日あし山隠れ早瀬のたぎ
ちさむくとよめり

早くすでに日が落ちたれば山の峡川床の
石のくろ〴〵と見ゆ

容積の大いなる山日をへだて峡の夕寒は
やくきびしも

夕溪はいつか暮れゆきせばまれる土肌の
冷え全身をおかす

たそがれの峡の小川を渡らんと下り立つ
石にたぎち寒しも

夕川のたぎちに濡れてくろき石目にたづ
たづし下り立ちわたる

冬に入りて

石見にて

學校の白壁に熱き冬日かも辨當前の授業
闌けつゝ

太陽は山の厚みの彼方なればこの面の草
の色のさむさよ

曇り空さむき空氣の冴えよどみ白菊の光
澤を抑へたるかも

磐床のくぼみにすめるたまり水冬蒼空の
遠々にうつる

石見潟荒磯吹く風へう〳〵と眞向よりわ
が歩みをはゞむ

下の關

海峽の落潮疾し市はてゝ寒くむなしき市
場より見ゆ

下の關も門司も夕さりどよめけるき中に
疾き瀬戸の落潮

崖に沿ふ港の街の神社境内雀地に下り跳
びとびあさる

折にふれて

草枯るゝこの冬堤に青みたる冬青草は何
に何にならむ

尖ほそき冬木の小枝大そらの若きにとが
り日にてらひたり

風なき晝まを冬木の枝にとべる小禽らの
羽音和(のど)にしきこゆ

日にてらふ冬木の枝を小禽らのなきうつ
りゐる動きのすゞどさ

小禽らは冬木の枝のつかまるに程よき枝
をなきうつりゐる

麥畑に冬木の小禽身をほそめとびくだり
たる捷(はや)き羽ばたき

峰(を)の上(へ)なるかれ草原に夕づく日あかくたも
たれかげりおそしも
額(ぬか)にせまりおほどかに暮るゝ山の容山下(かたちきんひ)
の人家(じんか)に夜の灯とぼれり

大き山容をくろみふもとべの地べたにひ
くき人家の灯かも

深夜

石見國温泉津港の宿に泊りたる一夜

何時(なんじ)をまどろみにけむおぎろなき深夜(しんや)の底にふつと覺(さ)めたり

寢しづまる街の遠くより下駄の音來(く)も地(つち)凍てたらむ

冴ゆる夜を刻々ふれる霜ならむ遠き下駄
の音枕にきこゆ

遠方の下駄の音來ずやみにけり深夜の地
を霜とざすらむ

くぐり戸に深夜はばかる話ごゑ眞面目に
ひくし內外に人居

一ところ深夜の底に人間の肉聲ひくゝか
たりあへるも

おほけなく深夜のしづまかきみだし人間
ものを敢へていへるも

聲びくにされどもつよく言ひかはす人一
途なり夜半の戸口に

つかのまの話の間にも直ちに深夜のしづ
まひたとせまるも

くぐり戸の內外の人の去りしよりしづま
りかへり更けつづけたれ

くぐり戸にふけてよりたる人のことを他(た)
國(こ)のさ夜に愛(な)しまざらめや

晩歸

終日(いちにち)を戸外(そと)にはたらき大き足しつとりは
こぴかへる百姓

苅穂負ひだまりうつむき百姓のやからか
へるも夕星いくつ

春おひたる垂穂のおもみ百姓はたへつゝ
あゆむ一足ひとあし

百姓の一歩一歩に春負ひたる垂穂ふさふ
ささやぎさやぐも

畑山夕空かぎるてつぺんに猶百姓のくろ
ぐろとゐる

鍬いれし畑のいく畝くろ〳〵と遠夕星の
下に暮れをり

月光

妻は佈にのせて先へやりつ。我一人後れて石州三隅の旅籠に着きしは、暮れはてし後なりき。

暮れてゆく道の底びえ目あぐれば月はみ

空にあかるみゐたり

さむ〴〵と暮れゆく道を猶あゆみ光りそ

めたる月を見るかな

山道はさむくさみしく月かゝり冬木の枝
のまみにつれなき

月あかるく草木(くさき)まざ〳〵てらさるゝ道の
ゆくてに歩みをはこぶ

月をあびみちのべ冬木立てる下(した)われ一人(いちにん)
のとほりゆくかも

月あかり林穿(うが)たずくらやみにかさこそ音
す小さきけものか

戸をしめて月をあびたる家の前を人なつかしく我はとほるも

月あかるく白き往還(わうくわん)山にかゝり敷ける冬木のかげ凍みてをり

近よれば冬木の上に月きたり空さす枝のありく〳〵と見ゆ

皎々と月冴え光りまさやかに見ゆる裏の山を風渡る音

障子の灯ぼんやりあかし戸外にはいたく
冴えたる月のするどさ

旅籠屋の裏の松山月に見ゆ霜夜あらしの
松を渡るも

料理屋の二階の灯かげ三味の音寒月の下
にいたくさびしも

加賀の潜戸

十月二十五日出雲國八束郡加賀浦の瀬戸に遊ぶ。

朝日の中御津浦峠のぼりたるに海眼をうてり紺青のかゞやき

崖下の人家の上に岬ゆもみさきの山へ海張りきれり

崖下の朝凪ぎ浦にむかふ村屋根の瓦に日
やゝたけたり

崖下の人家の列にふか〳〵と眞蒼き灣ぞ
たゝへよりたる

朝なぎの蒼き潮は涯もなし水平線のたか
きことかも

浦波の巖かろくうつ朝の凪ぎ底の藻くづ
に日は徹りたり

崖を呑に朝なぎ海にひたむかひ巖に釣す
る海人の子等はも
磯曲ありすなはち寄れる蒼潮に揺れゐる
舟は釣りせすらしも

崖の縁へ歩み近づきのぞけども見えぬ眞
下に波はひゞけり

朝凪ぎの磯の日おもて巖が根によれるさ
ざ波きらゝかに見ゆ

滑らなる巖の腹を波のうねゆれとほりゆれとほりすゝみゆくかも

今日(け)ふの行(かう)晝前になりやゝにひもじみちばた野菊の日にあたる花

大蔦浦

濕(ぬる)みつゝ日の透く波の濱におち砂の濁りをたてゝゐるかな

遠淺の濱に寄り來て波ひくし渚の砂に這ひひろがれる

秋半ば稀なる凪ぎの日うらゝに渡り鳥見
ゆ磯崎のうへ

舟は沖へうねりは磯へ空の下に行きちが
ひ行きちがひ浦わ漕ぎ出づ

晝たけて舟にひらける辨當の握飯眞白に
日の光りあり

岩鼻を一つめぐれば浦かくれ秋凪ぎ海の
ふくれうねれり

岩鼻をめぐれば外の海の大あをうねりに
舟のりおりす

岩鼻を舟がめぐればあらはれし向ひの磯
に波の寄る見ゆ

斷崖ゆ裂けくつがへり落ちしまゝ巖つみ
かさなれり海潮の中に

この日晴れ一天すめりわが舟を搖りては
すぐる蒼うねりかも

うねり浪舟を揺りすぎまなかひにたかま
り行けるその眞蒼さよ

わが舟を揺りとほりゆくうねり浪斷崖の
根に打ち揚ぐる見ゆ

底ふかくとよめる海の蒼浪を眞日うがち
入れり舟ゆのぞくも

うねり浪前にわだかまる巖床をおほひこ
えつゝ磯にむかへり

大き波しばしは見えず巌床ゆいま打ちあ
げし潮落ち來も

紺青の潮にのれる舟しづかに舷たゝくう
ねりの音す

斷崖の最うへに松をいたゞき底つ巌根に
波くだけよす

蒼潮に切り立てる崖のしかゝるすぐ下に
沿ひわが舟ゆけり

潮鳴れる洞穴の中をのぞきをれば入り行
くうねりにわが舟のめる
洞の底はくらさ深く透る海なればひたす
ら舟をたのみてゐるも

高く低く舟揺るうねりに心とられおほひ
かぶさるる窟見ることは見つ
洞の内潮の揺れの甚じきに舟にせまりて
巌根こぐしも

浪のうねり洞穴のおくに行きづまり巖の
壁へ大きくたかまる
外海よりこの洞めがけ入る浪の行きづま
りつゝとよみにとよめり

行きづまり窟の奥處うつ波にうつろは千
千にひゞきとよめり

巖穴の波鳴の音こと〴〵く人間舟にあつ
まりとよむ

潜戸の窟いく世經ぬらむ今日もかも波うねり入り鳴りとよみゐるし

舊潜戸

亡き子ろが夜きて積むとふ石の塔しめじめおほし窟の奥に

潜戸の窟しめ〴〵くらし吾子も來て何れの塔を積みにけむかも

吾子の爲にかさねし石を洞の奥にのこしては來つ背寂(うしろ)しも

午后の海潮滿てるらん往きに見し巖(いはほ)波か
つぎはつ〳〵に見ゆ

波のうねり低まれる時はつ〳〵に海つ巖
床頂き見ゆる

磯遠みひたすら寄れるうしほ波舟のへさ
きに裂けてちるかも

潮(しほ)くらき潛戸の洞をくぐり來てかへる大
蔦の濱のさやけさ

こゝの浦によらぬ蒸汽歟沖つ邊に煙なび
かせぽつゝり見ゆる

磯崎の切り通しに入りひや〴〵し海沿ひ
秋陽に歩きつかれつ

遠くあそびしみ〴〵かへる夕冷えに淡色
さゆるみちのべ野菊

佐陀川

生ひよれる眞菰の中の川水を發動船ゆき
うねらせにけり

石棺

松江にて

往來の日陰の側に花屋あり菊の莟の土間につめたき

朝の冷え未(いま)だも退(の)かず裾さむし花屋の土間を占むる菊の香

日のさゝぬ花屋の土間のつめたさに小菊
の束のおびたゞしもよ

玉造にて

遠世人埋めて置きたる石の棺見つけ出さ
れて日の下に在り

曲玉のつくりかけ見れば遠き世の人の心
を可愛くおもほゆ

筧よりおちゐる水はかなりふとみ池の深
みに徹りつゝ鳴る

やすらけく夕陽あまねき大空に青松山の
今日をくれをり

晩秋の日の入りあとの夕あかり松の色今
冴え〳〵青し

天長節祝日に子供等どうをたたく。どうはひらき鈍き一種の太鼓にてその形かなり大なり。

棒の上に大きなるどうをどかとのせ力一
杯たゝく子供等

子供の力むやみにどうをひつぱり行きも
一つのどうと並べてたゝく

伯耆の大山

面白さつのりたかまりどうたゝく子供一
斉にさけびたるかも

十月初、伯耆の大山に上り、二泊して麓に下れり。

いこひゐて目はすぐ前をみつめたり秋の

陽あつき草むらなるかも

森ふかみ地に落ちきたる硬き實の枝葉に

あたる音はやきかも

土にまで矮樹のしげみ突き穿ち硬き木の
實の眞直に落ち來

のぼり來て旅籠につけばとみに寒し障子
にあかきお山の夕陽

人間の稚兒の泣く聲いた〳〵し夕さりお
山の冷えきびしきに

山の宿夕冷えきびし湯に入れば手足にし
みてあたゝまりくる

山の宿夕冷えきびし湯に入れば薪けむた
くひもじさおぼゆ

ちぎれ雲走りつくして夕空にとよはた雲
のしづかにたかし

大山の峰の木原を遠入日あかくそめゐて
きざす夕冷え

大山の木原の上に星さえて夜さむ嵐のさ
わがしきかも

さむ〳〵と木原の奥に月ひくゝお山の嵐
吹きすさぶかも

大山の彌山に雲はたゞなはりあかつき起
きのさむくすがしもも

曉の木原の下はしめらへりはるか奥より
せゝらぎきこゆ

徑をきる山のせゝらぎすみとほりくらき
木原になが れ入りたり

峯ごしに雲はしりしが晝すぎて木原に霧
のおもくしふれり

山の霧しばらくふれり木原には雫の音の
きこえそめつも

山のきり次第におもくなりまさりやうや
くしげき木原の雫

霧雨のおもくし降れば山祉(やまやしろ)板屋根くろく
雫してをり

霧の雨山の社のひろ前の苦生にしづみひかりゐるかな

伯耆三朝溫泉

はるかなる高峰の松を仰ぎつゝ
我は歩みをはこぶ

わが影のうつる日なたの街道を
里かあるきて來たり

山川の夕さりたかく鳴るなべに岸の人里
しづまりかへれり

蒼き空今日はするどしきらめかしく山木
ゆする風村にしおろす

たそがれのたぎつ瀬近み川床の湯つぼの
湯氣のしみらに立つも

川原の湯しみ〳〵湧きてゐるならし湛へ
の面に氣(いき)しみふなり

夕川の川床の湯にひたらんと着物をぬげ
ば肌身愛(かな)しき

山川の川床の湯にひたりゐて遠夕雲に眼
をはなちたり

仕事をへつかれいたはる百姓とあたまを
ならべ外湯に入るも

川原湯を出づるわが身にほのじろくかは
たれの明(あか)りまとふ愛しさ

村の家の障子の灯影ぼんやりと道にあか
るむ夜寒を行くも

話し更け他所(よそ)よりかへる夜は寒し村の障
子の所々のあかるみ

提灯が近づきてみれば小きざみに兒がい
そぎをり村と村の間(あひだ)

この寢ぬる朝けに見れば三朝(みさ)川今朝もけ
さとてたぎちゐるかも

朝かげの麓をゆけば山はだの草生つゆけく面ひえおぼゆ

山川にわたせる橋にあたる日を踏みわけりけり向うの岸へ

つゆじもは下りにけらしも山川や濡れて旭にあたる巖のいたぶき

朝川のたぎちの水泡あをじろみ巖かげさむくとよみたるかも

巖かげにさむきたぎつ瀬かげをいで旭(つ)にほひつゝ流れさるかも

三徳山三佛寺

み寺の甍のうしろに立てる峰仰ぐにさやけき茅萱(ちがや)の光

村の西方、小高き處に、日露戦役戦死者の墓あり。

戰死者の墓はもかなり古りにけり赤い夕陽に曼珠沙華咲き

戰場に命死にけむその際(きは)にこの村里をこひにけむかも

月しろ

堤下（つつみした）の桑の立木にあつかりし日は夕づき
てきらめく川水

夏蠶（なつご）養（か）ふ村の男等夕いでゝ
たへり桑を摘みつみ

枝たわめ桑つむ時に唄うたへる男の顔見
ゆ夕日にてりて

夏光おとろへにけりながゝとわがかげ
うごく穂をはらむ田に

縁臺に寢てあふむけば夜露ふる遠星空が
わが眞上なり

灯をもてば廊下のてりの足下にひやゝか
なれやまだ宵のあさく

山國にて土冷え蟲のなくきけば二人の吾
子の墓べしのばゆ

人里のいやはての家の戸の前もすぎゆき
にけりもつ灯さびしも

この村里ともし灯しめり家々のはなしふ
けたり星空の下(もと)に

小衾を身にそぐはせていをぬればやすら
ぎおつる長夜のねむり

里の家寝しづまりつゝ山の端は月しろな
らむ雲しらみたり

山際(やまぎは)は月しろとなりさむ〳〵と川音さや
けみ夜はくだちけり

湖(うみ)の上に通り雨降り舟べりのかわきせは
しく濡れゆくを見る

この湖の水(み)の面(も)にあたる雨の音しみ〳〵に
なりつつ舟をめぐりて

通り雨水の面にやみて湖の上に夕明り空
の蒼くすみたる

漕ぎ入れば湖尻細江岸たかみ舟より見上
ぐる犬蓼の花

湖尻の江の水せばみ舟べりに觸れて眞菰
のずれゆく音す

伯耆東鄕池

耳につきて話聲あり湖見れば舟の在處(ありか)は
近くあらなくに

遠渚

蒼海原ふりさけみれば張りきれる一本(いっぽん)の
線に天とはなれたり

磐床に帆布ほされてすでに午(ひる)四面の潮の
紺青の搖れ

磯岩にほされし帆布へ眞上より日は照り
たけて十二時近し

陸(くが)めがけ風吹き上げて磯山萱なびきつゞ
けにひたなびきせり

近づける雨雲ひくみ沖くらし遠波がしら
いちじるく見ゆ

沖つ浪かきくもり見ゆ海を壓(お)しうごき來
る雲すでにか降れる

但馬香住岡見山

遠渚よる波しろく夕日てりこの巖かげの
冷えそめしかも

落日は海に遠くあり光よわく荒磯の岩に
およびたるかも

荒磯を山のへだつるこの窪に光たゝふる
椿の葉かも

草の穂

秋づけば露深小野のせゝらぎのこもらふ
水に揺るゝ草の穂

大木（たいぼく）の下に朝ゆきふみにけり昨夜（ゆうべ）の雨の
雫のあとを

大木の幹によりそひあふむけば枝葉のすゑを風わたりをり

まろやは手にさやりたれども母の眷に乳兒の熟睡はさめざりしかも

梢には夕陽なほありあふむきて松の根方にたゞずむ我は

夕ひゆる道となりけり苅草のにほひの中に我家へこひしも

太陽の在處雨ふる空にあかるめり松の葉
末の露ひかりかも

土より出でのびんとしつゝ低くある曼珠
沙華の蕾押し寄りあへり

砂川の底にひそみてぢつとせる小魚のも
てるのこの保護色はも

保護色にかくれおほせしつもりにて寄り
眼の魚の水底にゐる

水底の小魚の眼玉は寄り眼にて生意氣な
れど可愛くあるも

草しげり山

峰の松眞晝の空にくひ入れるくろき蒼さ

のもつぱらなれや

日ざかりの草しげり山氣のつかぬ高みの

ところに風ひそかなり

話聲は谿畑うてる百姓の晝やすみと知り
てなつかしむ我は

萱山に這ひはびこれる葛の葉のそよろと
もせず西日のさかり

道あらぬ草しげり山の急斜面(きふしやめん)てりさかる
西日にきらめけるかも

萱山の大き斜面に西日てれりまつたくわ
れはさゝやけきかも

すゝき葉の垂葉するどに眞西日をはじき
かへしてきらめけるかも

すゝき葉のさ青長葉のしげり葉のするど
に垂れて風あらずけり

すゝき葉のさ青垂葉のするどなる葉さき
にさやり指はきらせじ

すゝき葉の垂葉するどに青々しわれ肩す
りて通りけるかも

川堤の篠の新立ち舟をひくみ朝空のすみ
にぬきんでゝ見ゆ

驟雨

山かひを木高みしげみにはか雨楢にさや
げど未だ地を打たず

牛小屋に急雨よけ入り山桑の立木のしぶ
き見ぬる一時

ひたぶるに大地うたんとおちかさなり雨
ふりしけり向つ峰の前を
ひえおぼゆ
軒下の青草束に雨しぶき小屋中しめり肌

急雨きたり畳くらくなる牛小屋ににぶき
家畜の足音させゐる

急雨うつこの屋根の下のをぐらさにわが
かたはらになける牛はも

にはか雨おとろへきたり山にたつ靄こそ
見ゆれ小屋の戸いでむ

急雨さり牛小屋の戸をいづる時裾にちり
たる鳳仙花の露

降りに降り急雨霽れたり向つ峰の繁みを
わたる霧今は見ゆ

出石より久美濱へ

但馬出石鷄山

松の間の茶屋の筵に大き蟻這ひまはり居

山の日ざかり

一九三

日盛りの光みなぎり松の梢（うれ）の鶴の行ひけ

ざやかに見ゆ

松の梢に山の風鳴れば羽ばたきて巣立たんとする鶴の雛かも

河梨峠

山かひのわづかの畑のさゝげ豆畑つくり入今日は來ずけり

下りてゐし小禽はたちぬまがり來てこの山みちの日陰のよろしさ

丹後久美濱

心がちに大輪向日葵かたむけりてりきらめける西日へまともに

山あひのこゝまで入りこみ海すめりひく
ゝ垂れたる松のしづけさ

わが舟の波はよりゆきひそ〳〵と江のい
やはての葦間に入るも

離れ磯小舟日に照りひさしきは畑つくり
人上(あが)りゐるならむ

入海の潮たひらにくもりをり岸の堤をや
ゝに遠來(ごほこ)し

およぎゆかん入江の向うの岸遠しはだか
となれる小學生徒

少年等相ひつれおよぎはじめたり見てゐ
れば寧ろかなしきろかも

子供ゆゑ褒美なくてはと不憫がり妻が見
てゐる遠およぎの列

子供らの遠き游ぎをはげますと教師は舟
にて太鼓たゝけり

曇り海太鼓ひゞかず子供等のすなほさか
なし敢へておよげり
およげるにちがひなからん子供らの頭見
えねど太鼓はきこゆ

子供らはおよぎかへり來護衞船やうやく
大きく見えてきたりぬ

再び河梨峠

杉立つ峰俄かにくもり雨きたり繭煮る村
の屋根雫すも

畑坂に通り雨はれ桑の葉の濡れの照りあ
つしうつむきてのぼる

日のかげり

山に入りわがあゆむなべに森林の樹木の
幹のいりみだれ見ゆ

山鴉ころ〳〵のどをならしつゝ梢になけ
りこれは朴の木

大き雲日をめがけつゝうごくなり

をしつゝ峯に立てれば

に風のさびしも

大き雲に日の入りゆけば山の上の社の松

くもりつゝ白土今はまぶしからず山の社

の松のしづけさ

いりゆける雲がくり日はいまだいでず待

つとしもなくいこひてゐるも

日の前にはだかる雲のふち光りうごきに
ぶきを見つゝいこへり

かぶさるる縁(ふち)ひかり雲うごきにぶしこの
日のかげりながくつゞくも

いこひゐてやゝあり傍(そば)の矮生(わいせい)の雑木(ざふき)紅葉(もみぢ)
をあはれがりけり

白

晝

但馬瀬戸日和山

眞下に潮の寄する崖にして萱青々し日中の風

辨當を食べをへにけり濱山の笹に照る日はかぎろひてをり

岩の間に泡うかべたる晝の潮たゆらにぬ
るみ日はとのぐもる

岩と岩の間に潮のたゆたひて底の砂まで
眞晝日させり

岩の間に晝潮たゝへきりぎしに萱草咲き
てさびしきところ

きりぎしの石間に根ざしのびいでし青莖
の上の萱草の花

海のいろふかくよどめりしかすがに上つ
べとよみ波うごきよる

潮(しほ)よる荒磯の岩にひそまりて女の採れる
心太(ごころてん)草(ぐさ)

雲通り濱山笹の日のてりのたまゆらかげ
り波の音さびし

磯の日は今くもりをり崖の上にはびこる
葛の葉あまねくあをし

雲通り磯の日くもれり渚近き墓地ににほ
はし紅葵の花

遊びをへこの磯を去るころほひややうや
く渚の巖間潮騒

但馬竹野濱

わだつみにむかへる心へりくだり沖つ潮
騒に眼をみひらけり

磯山の松間ゆ見ゆるわたつみの眞日の下
なる潮のうねり

磯山の笹根ふみしめ瞰(ふかん)せば眞下によれる
眞青深潮

磯山の傾斜(かたむき)急に潮よする渚に及ぶ笹のは
びこり、

打ちあげし潮退(しほしり)けばすでに迫る後(あと)のうね
りを磐床までり

みち潮の大きうねりのあをぐろみ海(わだ)つ磐
床よりとよもすも

この浦に入り來る潮のいやはての此處の
巖間にひそかなるかも

曇れる川

水ふえてたひらにおもき大き川岸べゆ見
れば敢へてうごける

向う岸の山影ひたる川のいろあをみくも
りてうごきのにぶさ

まん〳〵とおもくくもれる夕べの川にぶ
く時なくわが前にうごく
幅ひろき街道ひくくしまん〳〵と流れ暮れ
たるくもり川べに

とつぷりと日のくれはてし河心より舟の
きしみのきこえ來るかも

向う岸の山の木鳴りて風いでぬ日ぐれ河
原を歩みかへすも

くもり夜を枝川のぼる舟の波水明り揺る
岸べにをれば

くもり風口ぐれ葦原はろ〴〵にさやぎ遠
さり行方しらずも

葉のさやぎしづまりあへぬ葦原にまたさ
やりつゝ風流らへり

葦原のそよぎひそけくくもり夜の川風遠
く吹き落ちにけり

雨

靄

幹くろくぬれそぼつ木を雨靄の傳はりゆ

くも峡のをぐらさ

ぬれしとる山樹(やまき)に傳(つた)ふ靄くらく時やみ雨

のたぐちに至る

大降りの雨中に立てる大木の枝葉おもり
てしとゞ雫す

夕近み雨いやくらくさむくなれり田圃の
簑笠かきくれて見ゆ

雨ふりの日暮れをちかみ雑木山風いちじ
るく葉裏かへすも

下つ枝は水にひたりて川柳ほつ枝ゆれを
り雨の日ぐれを

向うの山の茂りの前をいく時か雨とほり

をり今日はわびしも

雨ふれり丹のぬれいろの草花にむかひて

端居を久しくするも

四方の山に雲居雨ふり晝ふかし街の溫泉

にひたりに行かな

蠶(こ)をかへる家内(やぬち)をぐらし前の地に薄紅葵(うすべにあふひ)

こゝだ匂へり

舟とめてわりごひらきをればしづかなり

岸の萱生に晝顔は咲き

二郎に

大正四年十二月五日午前二時半、二男二郎逗子の寓にて死す。齢一年九箇月
報に接して逗子に赴く、此の子は殆その一生を病の為に苦み通せしなり。

二三二

この家に吾子死にてありいそぎ來て門入り行かむ力なきかも

今生を執念き病とあらがひて生きんとなせし吾子はも

いたつきに耐へて來し吾の子のをさ
なき力も爲るべくなりし
蠟燭の晝まの火立白布とれば眼をとぢ果
てし汝が顏はや

着物の下に手をやりてみれば亡せし子の
肌には未だぬくみたもてり
あとに殘る體溫表みて長き間病にたへし
子なりしとおもふ

たよりゐる聲ききしゆゑ死に近き瞳をあ
けて母見しか汝は

病もつ一生を終り今こそは吾子は眠りを
ほしいまゝにせり

あまりに汝が泣きさけび寢ねぬ夜をいか
りし事し今はさびしも

乳慾しく心はあせれ痙攣になやめりし子
は今日うせにけり

開け閉ての戸の音はぶかりあぢ氣なし今
はさめなん吾子ならなくに
泣きやめてほてりもつ眼に夕霧のつめた
さおぼえ戸外に佇む

しん〳〵と吾子が死骸のつめたさの抱き
ねし人をおかしけるとや
吾の子がつめたくなりしと云ふ事を妖言
ならできかんと思へや

看護婦も白き衣ぬぎしめやかに吾子につ
かふる今日しくやしも

ありし事どもかにかくに言ふに感じつの
り看護婦泣くも子の枕べに

世にあらば泣きまどはましをあをむけに
狹き棺に吾子が臥やせる

谷中の墓どころにて汝が兄とあそべと云
へば涙しながる

棺馬車の轍きしみて出でゆけりおくつき
にゆく吾が子の門出
葬式の出でゝさびしもかくのみにありけ
る子かと妻に云ひけり

葬はて人おのがじゝかへれども吾子のか
へらん時あらめやも

看護婦になが きみとりをねぎらへばわが
云ふ事がかなしくて泣かゆ

ふたゝび子どもうしなひしわが妻のはた
らける見ていとしさわくくも

乳兒の寢る熟睡は寢ねず夜毎になやみし
子故妻もやつれつ

夜くらし谷中の土に今もかも吾子は掌を
くみ眼つぶりてあらむ

抱きすくめ頰ずりすれば兒心にさも〳〵
やすらに笑みけるものを

萱山

亡き吾子の帽子のうらの汚れみてその夭(わか)死(じに)をいたいけにおぼゆ

木の花の散るに梢を見あげたりその花の

にほひかすかにするも

足たゆく床几にをれば水茶屋の葵の花に

日照雨(そばえ)かゝるも

向うの山の大きな斜面彼處には百合咲い
てをりはるかなるかも

山獨活の花うかび見ゆふか〳〵とふもと
萱原遠ひろき上

まろらなる青萱山のふもとに風萱おしなび
け光りはしるも

山百合の咲かんとおもひ萱ふかき土より
いでよふくらむ莟

森の端の一樹の白き花ざかりこゝだく蝶
の來てまつはれる

山の中の晝はたけなはしん〳〵とふかき
しゞまを耳底に堪ゆ

山の下湖のすぐそばに灯をともしこの村
の家はよりそへるかも

さむ〴〵と霧ごもりつゝくれなづむ村里
の裏にたぎつ夕川

夕川のたぎちのさむさ磐床に息をふかめ
てわれ立ちにけり

生一本に夜を日につぎて山河のたぎちの
とよみとぶまらぬかも

眞黒雲片空寄りにおつかぶさりなゝめな
る太陽が萱山射れり

太陽の前に大きくろ雲はだかれば深かや
山の光にぶれり

女郎花ふくむ萱山濡れなびき雨は嵐にな
らんとするも

通り雨とほりをはればいや高く雲のきれ
めに蒼き空見ゆ

蒼き空雲のきれめに遠きかな草間の虫に
耳まかせをり

雑木の芽

せゝらぎの朽木越ゆるにふくらまり水(みづ)の
面(も)のしわみふるへてゐるも

雨後(あめご)の黒土にあるひざわれは生(お)ひ出(で)くる
種子(たね)の擡げゐるならむ

草山の低き雑木が新芽ふく枝のささきさき
いのちかへり來

雑木の芽かたくむすべる葉をゆるめ春の
しめりに馴れそめにけり

生垣に沿ひて一路のまがれるにわれもま
がりて行くこゝろかも

新道のこゝの曲りに人見えずゆくてに白
き夕山櫻

新道の道はぐひろみやまざくらほのじろ
みつゝ暮れがてぬかも

夕山の新芽にまじるさくらの花明るみな
がくのこりてゐるも

春山の雑木の花の黄いろきを見あげてわ
れはふもとゆくかも

晝冷えて新芽に靄のつゆたまる雑木林に
道は入りつも

照りとぶまる春の日輪庭の奥に緋木瓜の
花の熱(ほとり)に倦める

鉢植の草花のにほひ晝ふかみひそまれる
われにときぐせまる

枳殻(からたち)のかたくかぐろき刺(とげ)の根に黄いろの
芽あり春たけにけり

この花は受胎のすみしところなり雌(し)蕊(ずゐ)の
根もとのふくらみを見よ

往來の日ざしをつよみおちちれる紙片ま
ぶし夏ならんとす

夕ぐれの灯まだひからぬ縁日に草花のい
ろのあざやかに見ゆ

ふる雨の枝葉つたひてしづくする音のこ
もれる杜をよぎるも

露じめる田圃の灯みてあればにぶくうご
けりともしき灯

冬山

さむ空の下(した)をあるきて踏み渡る小流(こながれ)土橋
にしたたしさおぼゆ

向つ峰の松ははてなき蒼空を背向(そがひ)になし
てそびえたるかな

雜木山落葉しつくしこの頃の冬日に光る

は椿と青木

底溫(そこぬく)き落葉の中に常盤樹の芽生そだてる

こゝの杜かも

冬空の下に相寄りこんもりと此の杜の樹

は枝交へたる

青木の實毎年落ちて生ひけらしこゝの谿

間の多くの青木

青木の實赤くなりたり冬さりてかわきき
りたる山の斜面に

ひえ〳〵と今日は雨降り青木の葉なめら
にぬれて今日は雨ふり

裏山の冬木にそゝぐさむ時雨見てゐる程
にいやさびしもよ

窓により仰げば見ゆる裏山の尖ほそ冬木
はさびしきかもよ

高麗山の松の梢ののどやかにかすみてを
見ゆ日は海上に

行きずりの小松が中に鳴きうつる鵠見い
でてひそかにあゆむ

向つ峰の松の林に朝日さし木の間木の間
のきらひたり見ゆ

冬山の日なたにをれば木をこれる音こそ
ろよく峡にとよめり

密柑の香

街をゆき子供の傍を通る時密柑の香せり

冬がまた來る

子供ゐてみかんの香せり駄菓子屋の午後日のあ

たらぬ店の寒けさ

向つ峰の午后の陽見つゝ淺山の谷かげ紅葉折るさむさはも

洛北大原にて

寂光院の尼の頬あかき午后にして日は照り雨の粉ちりにけり

鶏井戸天神初卯

堀割の低き堤ゆき冬の宵の心なごみぬ初卯の歸り

宵闇の本所の堀割岸ひくみ水の明りを見つゝ歩むも

酒を飲みて氣がほぐれたれば夜目に見る
人も灯も我によきかな

雨あとの今宵は寒さもゆるびをり道わる
の街を友と通るも

三十間堀

堀割のよこれてとろき水の搖れ生臭きか
も曇天の下に

高原

高山のいたやもみぢのかさなれる枝葉仰ぐも根の土ふみて

木深みに行きとまる吾をとぢこめてよどめるしぐまひた寄り來るも

このみちゆ草原つゞきの萱山の青まろ山
を見つゝあゆむも

青草の山に上る

日かゞやく高原にとほる道を遙かに先へ
行きし連れのすゝみにぶく見ゆ

みづうみの岸の青山ふもとべをめぐり行
きけらし人遠方に見ゆ

みづうみに岸の青山うつりゐてあそぶ此
の日も夕ちかみきぬ

高原に夕日そゝげりうちわたすくさ山か
げの尾花しろしも

しみ〴〵と朝の日ざしの土にあり隣家の
障子つめたくを見ゆ

東京に歸りて

この朝けくちそゝぎをれば工場の汽笛の
鳴りよ秋ふかみけり

濡るゝ樹木

箱根にて

大いなる青草山に對ひつゝおのづからなるつゝしみおぼゆ

湯本みち夜のしめりにほのかにも吾にほひくる木の花のあり

見上ぐれば端山繁山の上の空たゞにをぐ
らみ雨は降るなり

雨くらき向ひの繁山高處にて木ぬれに白
きは朴の花かも

雨の中に立てる大木枝葉より雫つたひて
幹くろみ見ゆ

雨そゝぐ青葉の内部の樹の枝にかゝりて
咲ける蔓の白花

雨が樹に降りてゐるかもいつまでも後(あと)よ
りあとより降りてゐるかも

土のしめり

根ざす地の温(ぬく)みを感じいちはやく空いろ

花咲けりみちばた日なたに

この日ごろ地面(じめん)しめらひ空いろの草花咲

かすよき地面かも

夕づける風冷えそめぬみちばたの空いろ
小花みなみなつぼむ

冴えかへり雪ふるなべにみちばたの空い
ろ花は一日とぢたり

充分に太陽にあたり草の萠えふとくのび
たりこゝの堤に

草はみなしめれる土にめい〳〵のかげを
おとせり日の夕ぐれに

大きな娘叱られしゆゑ胸のうちにいとし
くなりてその指を見る

女の子の赤い蝙蝠傘が青くさの野をゆれ
ゆれて行きつくしけり

ロベリヤの紫いろがしつかりとその位置
占めて咲けるくもり日

集の末に

この集に收めた短歌五百十六首は、大正三年三月自分の第一歌集「銀」編輯後から、大正六年十二月迄の作から選んだ。改めた歌もかなりある。順は新しいのを先にした。

大正三年三月三日に生れ病弱であつた二男二郎も、翌年十二月四日に、逗子の寓居でなくなつて了つた。妻の健康はこの二個年に甚しく衰

へた。

その後吾々夫婦は長い旅行を思ひ立ち、五年六月初東京を出て、伊勢奈良京都を經、但馬の城の崎溫泉に夏三月を滯在した。その九月の末から、伯耆出雲と山陰道を西に下り、十一月には石見に入り、鐵道の未だ出來てゐない地方を、多くは歩いて旅をつゞけた。氣候はもう可なり寒くなつてゐた。さうして十二月初旬に、津和野から中國の脊髓山脈を越えて、山陽道の周防山口町

に出た。津和野山口では、妻の氣分が勝れないので、土地の醫者に來て貰つたりした。寒月の夜に、大きく、かぐろく聳えてゐる津和野の青野が岳を、今もまざ〳〵思ひ出す。

これから海峽を渡つて、その歳の暮に、九州別府に着いたが、この地で翌年六月廿九日に、長女の夏子が生れたので、滿一個年をこゝに送る事になつた。この子はかなり丈夫だつたので、吾々は安心して愛を投けかけてゐたのに、自分が、妻

の母と共に旅行してゐる間に、風邪にかゝり、それが肺炎になつた。四國の道後でこの報に接した時は、心配で食事の味が殆わからなくなつた。急ぎ歸り、一心に看護してゐる妻に力を合せたけれども、子供は助からなかつた。妻の悲嘆は見るに堪へられなかつた。何故にかく人間の子供は育ち悪いであらうかと思はれた。

吾々は今でも時々この旅行の時の事共、殊に別府で、子供を持つてゐた時の事を語り合つて

感懐に堪へないのである。

この集の歌の大部分は、その旅中の作である。

この集を編むに當り、佐々木信綱先生は文法上の注意を賜はり、兒島喜久雄兄は、非常な好意を以て、裝幀をしてくれた。こゝに御禮を申し度くおもふ。

又紅玉と云ふ名は、泉鏡花氏の短篇集にあるのを知つたから、氏に御話したところ快諾を得たので、氣持よくこの名を用ひる事が出來たこ

とをも玆に謝し度い。

大正八年四月三十日夜
鎌倉大町にて　利玄

紅玉奥付
大正八年七月十五日印刷
大正八年七月二十日發行
不許複製
著者　木下利玄
發行者　長谷川巳之吉
發行所　東京芝公園玄文社
付刷行製玄吉社